

# 日本の児童生徒における人間の多様性への寛容について

— 研究覚書 —

渡 辺 弘 純

(教育心理学研究室)

(平成18年6月2日)

## On tolerance for human diversity in Japanese children and adolescents: Study notes

Hirozumi WATANABE

### 1. 寛容への関心

第二次世界大戦後まもなく、1946年11月4日に発効したユネスコ憲章 (Constitution of the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization) 前文は、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない (That since wars begin in the minds of men, it is in the minds of men that the defences of peace must be constructed)」で始まっている。国連は、その後、1948年の第3回総会で、世界人権宣言 (Universal Declaration of Human Rights) を採択した。また、1995年を、国際寛容年 (Year for Tolerance) としたが、そこでは、寛容が、「他者の認識および尊重、あるいは他者とともに生活し、他者に耳を傾ける能力」であるとされ、寛容が、あらゆる市民社会の基盤であり、平和の強固な基盤である、と位置づけられている。翌1996年には、国際寛容デー (11月16日; International Day for Tolerance) が制定された。ここに挙げたのは一例に過ぎないが、国連は、絶えず寛容の精神を説き、その現実化を追求し続けている。

しかし、21世紀に入って、これに逆行するかのような事態が世界各地で引き起こされ、冷戦終結後、ますます深刻さが増しているようにさえ感じられる。アメリカ合衆国を中心に眺めても、2001年9月11日のアメリカ・ニューヨーク同時多発テロ、その報復としてのアフガニスタン攻撃、大量破壊兵器の保有と圧制を理由として2003年3月19日に開始された対イラク戦争、その後今日まで続くイラクでの流血の惨事など、常に寛容とは、無縁の世界が進行している。また、同じ中東でのパレスチナとイスラエルの衝突は、泥沼化の様相を呈している。

国家間の衝突に、宗教間あるいは民族間の鋭い対立が絡み合う事態の展開も様相をさらに複雑化している。

「寛容論には伝統的に哲学分野からと政治的分野からという二種類の立論がある」(森本、2004)といわれるが、より一般的には、宗教と政治の2つの方向からの接近が行われていると言っても間違いではないと思われる。国連における活動は、いうまでもなく現実的な緊迫した政治状況の中での表現として位置づけられる。政治と宗教の双方にとって、切実に当面の解決が求められている課題が山積する事態の進行がある。

加えて、経済活動のグローバル化の急激な進行が人と物の往来を加速し、インターネットに代表されるコミュニケーションの質的転換とも相俟って、文化面においても、「普遍的な文化」が、「ローカルな文化」と衝突し、これを飲み込む勢いを増しているようにみえる。事態の深刻さが、多様な形での衝突に折り合いをつけることを志向する「寛容」を、多くの人々の関心事とさせているといっても過言ではない。

このような背景のもとで、2003年に、アメリカのユダヤ人として生きる政治理論家ウォルツァー著/大川訳『寛容について』(Walzer, 1997) が出版された。そこでは、寛容を普遍的な原理としてではなく、すなわち、寛容一般を抽象的に論じるのではなく、政治編制 (寛容体制) を、多民族帝国、国際社会、多極共存・連合 (国家)、国民国家、及び移民社会 (国家) の5つのモデルとして摘出し、それぞれについて、寛容を、体制 (全体) と集団と個人の関連において描出している。

わが国でも、世界的な政治展開ばかりでなく、グローバル・スタンダードといわれる、いわば米国 (世界) 基

準のもとでの多様な分野における再編成が進んでいる状況を反映して、寛容への関心の高まりがある。そして、前述の訳書の他にも、『寛容と自由主義の限界』（メンダス著／谷本・北尾・平石訳、1997）、『寛容の文化』（メノカル著／足立訳、2005）などの訳書、『理解できない他者と理解されない自己—寛容の社会理論』（数土、2001）、『正義論／自由論—寛容の時代へ』（土屋、2002）などの著書が出版されている。

しかしながら、わが国においては、宗教以外の分野で、寛容について、真正面から取り上げた実証的な研究展開は乏しいと言わざるを得ない。筆者の知る限りでは、例えば、21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」（京都大学大学院文学研究科）の一分野として、「多元的世界における寛容性についての研究」など、いくつかの研究が、宗教に限定されない広がりを持って進められようとしているに留まっている。

## 2. 心理学分野からの接近

欧米において、宗教や政治の分野では、寛容 (tolerance) という用語が頻繁に使用されてきた。しかし、欧米においても、心理学の分野では、寛容があまり使用されず、その対極にあると考えられる偏見 (prejudice) という用語が使われてきた。偏見とは、人には、客観的な根拠に基づかないで、先入観や予断によって、個人の属する集団や文化などに対して非好意的な判断を行う傾向があるが、この傾向によって引き起こされる思考や感情のことである。オールポート (Allport, 1954) の『偏見の心理』（原口・野村訳、1961）は、わが国においても最もよく知られている偏見研究の古典的文献である。そこでも、偏見が、寛容と対比的に取り上げられ、人種 (民族) を中心に論じられている。彼は、「人種偏見は、間違った頑迷な一般化に基づく反感である。それは感じられ表出される。それは全体としてある集団に向けられたり、あるいは、ある人がその集団の成員であるということによってその人に向けられる。」と、定義している。

オールポート以降も、欧米では、継続的に偏見に関する研究が蓄積され、最近でも、Young-Bruehl (1996), Swim, & Stangor (Eds.) (1998), Plous (Ed.) (2002),

Fishbein (2002), Mackie, & Smith (Eds.) (2002), Chin (Ed.) (2004), Nelson (2005), Bakanic (2006) など、多数の著書が次々に刊行され続けている。そして、オールポートが、『偏見の心理』を出版して50年を記念する書物 (Dovidio, Glick, & Rudman (Eds.), 2005) まで刊行されている。

これとは対照的に、わが国では、寛容ばかりでなく偏見についても、社会的背景の相違の反映ではあるが、継続的な研究が蓄積されている状況には無く、社会心理学の概論においても、偏見に全く触れないものも少なくない。その中であって、ブラウン (Brown, 1995) の著書の訳出 (橋口・黒川編訳、1999) は、貴重である。ブラウンは、その著書で、偏見を「ある集団の成員であるとの理由で、その集団の成員に対して、軽蔑的な社会的態度や認知的信念の保持、否定的感情の表明、敵意や差別行動の誘導などをする事。」(前掲書、8頁) と定義している。また、最近、上瀬 (2002) は、視覚障害者に対するステレオタイプの変容を取り扱った自身らの研究 (2002) を含めつつ、主として欧米の研究を紹介した『ステレオタイプの社会心理学—偏見の解消に向けて』を出版し、社会心理学者である坂西 (2005) は、独自の視点から『近代日本における人種・民族ステレオタイプと偏見の形成過程』を探究している。さらに、児童を対象に調査したものとしては、木船 (1986) や渡辺・植中 (2003) による障害児 (者) に対する態度に及ぼす交流経験の影響を取り扱った論文などがあるが、わが国では、きわめて例外的な試みである、ということができる。もちろん、偏見ではなく、寛容そのものに関連する研究がわが国では皆無であるというわけではない。たとえば、小林 (2003) は、携帯電話によるメール利用と社会参加・政治参加の減退や異質な他者に対する非寛容性の増加などについて検討している。しかし、寛容を独自に取り上げた本格的な検討は、行われていないのである。いうまでもなく、近年、ジェンダーに限っては、わが国においても、その旺盛な研究への志向が認められる (たとえば、青野・湯川編、2006)。しかし、ここでは、ジェンダーについては、かなり大きな独自の領域を形成している分野であるので、当面触れないことにする。

このようなわが国の研究状況の中で、山内 (1996) の聴覚障害者を対象として行われた偏見解消に関する一連

の系統的な研究展開は、特筆すべきである。オールポートは、偏見の低減について、「集団間の緊張と敵意を低減する最善の方法が、さまざまなやり方で相互に接触させることだ」（ブラウン著／橋口・黒川編訳、前掲書241頁）という「接触仮説」を提言した。もちろん、単純な接触が偏見を増幅すること、たとえば、白人と黒人の居住の近接性と白人の反黒人感情の明確な相関を示し、接触が偏見低減へ導くためには、いくつかの条件が必要であることも指摘している。これらの条件について、ブラウンは、4つの条件として取り上げ、①接触を促進するための方策に社会的および制度的支持がなされること、②接触は当該集団成員間の意味のある関係性を発達させることができるような、十分な頻度、期間、および密度の濃さで行われること、③接触状況では当事者は出来る限り対等な地位であること、④接触には協同活動を含むこと、とまとめている（ブラウン著／橋口・黒川編訳、前掲書242～278頁）。山内は、第一の条件はともかくとして、その他の点では、ブラウンのいう条件にほぼ合致する巧みに工夫した実験を計画し、実証的に偏見の解消を示している。そこで、氏は、盲学校生と普通学校生との多様な交流を吟味し、両者の協同という形態での接触、すなわち、両者がともに「報償性」（Winch, 1958）を感じる交流こそが、偏見的態度を変容させる、と結論づける。また、氏は、次の①～④の条件を満たすとき、接触が障害者への偏見的態度を変容させる、とも述べている。①偏見と一致しないポジティブな情報を得ることのできる接触、②障害者をカテゴリー（外集団のメンバー）としてではなく、一個人として見るような接触、③障害者と健常者との差異性・異質性ではなく類似性が着目される接触、④偶然ではなく、計画的に行われるポジティブな相互作用の接触、⑤接触する相手と対等な関係がつけられる接触。そして、これらをまとめて、協同による接触は、4条件のすべてを満たしているというのである。

### 3. 寛容とは何か

寛容への関心の高まりを指摘し、寛容への心理学的接近が、寛容よりも、むしろ寛容とは逆の極にあると考えられる偏見について盛んに行われていることを示してきた。一步ずつ、寛容に接近しようとする立場から、再び寛容に立ち返り、その辞書の定義から始めることにする。

まず、国語辞典の定義を取り上げる。国語辞典は、日本における一般の人々の常識的な理解を示していると考えられるからである。広辞苑第五版（新村編、1998）は、寛容について、「①寛大で、よく人をゆるし受け入れること。咎めだてしないこと。②他人の罪過をきびしく責めないというキリスト教の重要な徳目。③異端的な少数意見発表の自由を認め、そうした意見の人を差別待遇しないこと。」と説明している。新明解国語辞典第六版（山田主幹・柴田ほか編、2005）では、「（失敗などをとがめだてしないで）他のいい面を積極的に認めようとする様子。」と、大辞林第二版（松村編、1995）では、「心が広く、他人をきびしくとがめだてしないこと。よく人を受け入れる・こと（さま）。」と、また、大辞泉（松村監、1995）では、「心が広くて、よく人の言動を受け入れること。他の罪や欠点などをきびしく責めないこと。また、そのさま。」と、それぞれ記述している。これらの記述から、一般には、日本語の寛容は、かなり広い意味を含んでいること、そのうち特に、何らかの問題がある諸点について、広い心で受け入れること、を意味していることがわかる。しかし、われわれは、寛容の対象となる他者に非があるとは考えないので、これらの記述のうち、大辞泉の第一の定義や広辞苑の定義③が、われわれの寛容の認識により合致していると捉えることにしたい。

なお、和英辞典では、プログレッシブ和英中辞典第三版（近藤・高野、2001）は、寛容を、〔異なる意見・行動などを許容すること〕 tolerance: [度量の大きいこと] magnanimity, generosity とし、真っ先に、tolerance を挙げ、適切に説明している。しかし、新和英大辞典第五版（渡邊ほか編、2004）においては、broad-mindedness; magnanimity; tolerance; indulgence; generosity; leniency; forgiveness; forbearance を示し、寛容という語が包含している〔心の広さや寛容や寛大など〕多様な広がりをも、そのまま表現している。このように多数の英語を付すのは、日本語の寛容の持つ意味の曖昧さから当然であるといえることができる。

英和辞典では、新英和大辞典第六版（竹林ほか編、2004）が、tolerance の訳として、第一番目に、「（他人の説・信仰などに対する）寛容、寛大、許容、偏見なき関心、公平な味方」を、第二番目に、「耐えること、我慢；耐久力」を挙げている。また、ジーニアス英和大辞



典（小西・南出編集主幹、2001）は、第一に、「忍耐（力）、我慢」と、第二に、「[宗教・人種・行為に対する]寛容、寛大さ；許容、容認」と、説明している。前者の第一、及び後者の第二の訳が、われわれの取り上げる寛容である。

英語や米語の辞書では、どのように説明しているだろうか。*The New Oxford Dictionary of English* (Pearsall (Ed.), 1998) は、tolerance を、第一番目に、the ability or willingness to tolerate something, in particular the existence of opinions or behaviour that one does not necessarily agree with と説明している。*Webster's New World Dictionary of American English, Third College Edition* (Neufeldt (Ed.), 1988) でも、第一番目の説明として、a) tolerating or being tolerant, esp. of views, beliefs, practices, etc. of others that differ from one's own b) freedom from bigotry or prejudice を挙げている。このことは、英米における日常的な理解が、われわれが取り上げる寛容 (tolerance) を意味していることを示している。

それでは、心理学の辞書には、どのように記載されているのであろうか。わが国の辞書においては、ほとんどの辞書が、寛容を取り上げていない。筆者の知るところでは、唯一、教育心理学新辞典（牛島ほか編、1969）が、generosity という英文を付してはいるものの、われわれが寛容 (tolerance) に含意するラインに沿った内容を次のように展開している。「他人の行為・意見さらに思想や生活態度などについて、その大部分または全体を許容すること。たとえ自分の意見や思想や生活態度と一致できなくても、また弱点や欠点に気づいていても、他人のありのままの状態を黙視・黙許する——つまり自分と異なった意見や生活態度と、自分のそれらとの共存を認めることである。教育心理学の領域では、宗教的情操の育成に際して、またカウンセリングにおけるカウンセラーの態度に関して、特に問題となる。(以下略)」と。略した部分では、宗教教育について論じている。その他の辞書では、たとえば、最近出された心理学辞典（コールマン著／藤永・仲監訳、2004）には、偏見 (prejudice) は取り上げられているが、寛容 (tolerance) の項目は無い。また、発達心理学辞典（岡本・清水・村井監、1995）や心理学辞典（中島ほか編、1999）においては、寛容ばかりでなく、偏見も項目として取り上げられていない。

これに対して、英文の心理学辞典では、コールマンのものは別にして、寛容 (tolerance) を取り上げることも多い。*Dictionary of Psychology* (Chaplin, 1985) では、第一義に取り上げ、an attitude of liberality or noninterference in the behavior and beliefs of others と説明している。*The Dictionary of Psychology* (Corsini, 1999) では、第二番目に取り上げ、In social relationships, an attitude of indulgence or acceptance, especially for ideas or behavior that differ from personal ones or the society at large と記述している。しかし、*Concise Encyclopedia of Psychology* (Corsini, & Auerbach (Eds.), 1996) では、prejudice and discrimination の説明にはかなりの行を割り当てている一方で、全く寛容に触れていない。そこには、Stereotyping の項目もある。

これらの辞書の検討から分かることは、寛容は、英語や米語圏においては、心理学辞典でも取り扱われてはいるが、それ以上に、はるかに身近な国語辞典で丁寧に取り挙げられていることである。すなわち、欧米でも、心理学研究の分野よりも、社会一般において取り上げられている用語である、ということが出来る。必ずしも心理学の分野においては、日常用語と同等の地位を築いているとは言えないのである。欧米において、社会的な日常の文脈で、寛容が使用されている内容が、われわれの研究対象とする寛容なのである。政治や社会政策などの文脈では重要な課題となっているにもかかわらず、米国や英国の心理学分野において、寛容の代わりに偏見が使用されるのは、あの著名なオールポートが力説し、多数の著書が出版され続けていることを反映しているからであらうか。このような展開と比較すると、わが国においては事情が大きく異なっている。寛容は、一般にはよく用いられるが、その意味は、「落ち度に対する寛大さ」であったり、「まあまあ」というような曖昧な玉虫色での解決に関連するような態度であったりするのである。したがって、寛容の使用については、意味の限定が必要とされる。そして、わが国の心理学分野では、全く使用されていないということも出来る。偏見ですら、社会心理学の片隅で議論される状況に留まっているということも出来る。発達心理学や教育心理学分野では、偏見でさえもほとんど議論されてこなかったのである。

#### 4. 寛容や偏見の対象となる「所与」の集団とその成員の諸特徴に対する態度と感情

欧米の社会心理学研究においても、わが国と同様、寛容という用語が使用されることが少ないため、まず最初、偏見について取り上げることにする。偏見研究は、集団に対する態度や感情について、さらに言えば、集団の成員に対する態度や感情について取り扱ってきた。それは、偏見の定義にも認められる。さきに示したように、オールポートは、「(偏見は)全体としてある集団に向けられたり、(中略)ある人がその集団の成員であるということによってその人に向けられる」と言い、ブラウンは、「その集団の成員であるとの理由で、その集団の成員に対してもつ否定的態度、情動、行動である」(ブラウン著/橋口・黒川編訳、前掲書15頁)と述べている。

では、偏見の向けられる、あるいは寛容の対象となる集団とはどのようなものであろうか。ウォルツァーに代表される政治学における「寛容」や社会心理学の「偏見」研究において取り扱われる集団は、明確に社会的に特徴づけられ区分される集団である。典型的な集団を具体的に挙げれば、皮膚の色・目の色・骨格などからいう人種(race)や言語・習慣などからいう民族性(ethnicity)、宗教(religion)、及びジェンダー(gender)である。より詳細に列挙すれば、Chin(2004)が指摘するように、人種、民族性、宗教、及びジェンダーに加えて、障害(disability)、明確に区別できる身体的特徴(physique)などとなる。あるいは、これらに、Bakanic(2006)のいう階級(class)を付け加える必要があるかもしれない。ウォルツァーの著書では、人種、エスニシティ、宗教、ジェンダー、階級、それに加えて真っ先に権力が取り上げられ、「さまざまな社会集団の差異を折衝する政治的実践を考察する」と、その訳書の帯に記されている。

ウォルツァーは、「集団の徹底した所与性」、すなわち、集団の生を生きている本人にとっての、「どうすることもできない所与」という表現を使用している(ウォルツァー著/大川訳、訳者あとがき194~196頁)。人は、ある場所で、ある集まり(集団)のなかに生まれさせられ、生まれついた状況(「集団の生の位相」)に置かれるのである。「生まれついたその人からみれば、その集まりは、どうすることもできない所与(a radical givenness)、贈り物としてある」。成長して後には、その場とその集団か

ら脱出することが可能でないとは言えないが、差し当たりは、そこに身を委ねなければ、生きのびる術はないのである。

成人ではなく、より若い児童の仲間関係における偏見や差別を取り上げて偏見の起源(The Origins of Prejudice)を論じるFishbein(2002)においても、聴覚障害(hearing status, that is, deaf)、知的障害(intellectual status, that is, mentally retarded)、ジェンダー(opposite sex)、及び人種(African Americans)を各章で取り上げて展開していくのである。ここでも、偏見研究の出発点には、脱出しようとしても脱出できない所与の運命づけられた集団の存在が前提にされていることがわかる。

このような理由からであろうか。欧米における寛容や偏見、とりわけ偏見の研究のなかに、科学研究による継続的な事実の積み重ねという立場ばかりでなく、それを超えて、如何にすれば、寛容が打ち立てられるか・いわれ無き偏見を克服できるのか、その道筋を明らかにしようとする企図、を読み取ることができる。研究者は、「曲がっているものを叩き直す」とでも形容すべきような圧倒的な使命感に溢れているようにみえる。しかも、現実政治の上でも、人種的差別政策を転換させてきたといった前進を勝ち取ってきたことに裏打ちされた自負からであろうか、偏見の執拗な継続とその打破の困難さを繰り返し指摘しつつも、楽観的な未来への信頼の感覚が伝わってくるのである。

それでは、偏見研究は、集団を対象とするものであると断言できるのであろうか。ブラウンは、オールポートの視点の展開(ブラウン著/橋口・黒川編訳、前掲書9~15頁による)として、「偏見を集団過程であると考えると同時に、偏見を個人の知覚や情動、行為などの水準で分析できる現象であるとみなそうとする視点」を取るのである。彼は、偏見を主として集団過程から生じる現象であると考え。しかし、同時に分析の焦点を主として個人に当てるのである。彼は、「他の集団の成員に対する個人の知覚や評価、行動的反応に大きな影響力をもつさまざまな原因要素に関心がある」、「私の関心は、個人の社会的行動に及ぼす偏見の影響である」とも述べている。このような立場から、「偏見を集団に基づく現象であると同時に個人の認知や情動、行動の水準として研

究したいという明白な矛盾を解決できる」とするのである。いうまでもなく、彼は、「集団成員としての個人の行為（すなわち、集団成員性）と、個人としての個人の行為との間を区別し」、前者に分類される行為に関心を寄せるのである。彼らの社会心理学からの接近は、相互作用を想定した、集団から個人あるいは個人から集団を見る視点、とでも形容できるであろうか。

その上で、「偏見の分析にはいくつかの異なる水準があり、社会心理学的視点はその中の一つにすぎない」と言い、偏見解明における社会心理学の特権的地位を主張するのではなく、多様な水準の研究の共同の必要性を力説している。たとえば、ブラウンは、「社会構造とその下位集団の編成、それらの社会的配列などが、偏見の創出と維持に貢献している」などとも述べ、より大きな文脈での研究の必要性も指摘する。

「寛容は生そのものを支える」・「寛容は差異を可能にし、差異は寛容を必要不可欠なものにする」（ウォルツァー著／大川訳、前掲書10頁、共同体についての記述）などという政治分野からの探究も、別の水準における研究であると位置づけることができる。ウォルツァーの地点から取り扱われる寛容が、体制を抜きに集団は捉えられず、その集団を抜きに個人は捉えられない、との立場から考えられる対象であるのは、理に適っている。体制と集団と個人のダイナミズムが問題であり、単なる個人には全く関心が無いように見える。彼は言う。「わたしが焦点をあてようとするのは、市民社会やさらには国家において常軌を逸した個人や異論を唱える個人を寛容にあつかうことではない」、「違いがあるがゆえに孤立し常軌を逸した個人を寛容にあつかうのはかなりたやすい」などと（ウォルツァー著／大川訳、前掲書22頁）。

## 5. 個人の発達過程における人間の多様性への寛容

子どもが特定の時代（時間）に特定の場所（空間）に、特定の家族や大人たち（集団＝仲間）に囲まれて生まれ、その制約のもとで育つことは論を待たない。発達心理学的研究は、そこで生まれた子どもの成長と発達を対象としている。いうまでもなく、成長・発達する子どもの人的環境（集団）は、子ども主体にとっても所与のものである。しかし、社会心理学が偏見の対象とするような集団が、子ども自体の意識（認識や感情）の中に、当初よ

り固有の形態を持って存在しているとは考え難いのである。発達の過程で、集団が次第に形を現してくるのである。そのように捉えるならば、社会心理学において捉えられる集団とは別の文脈で集団を捉えることが可能ではないであろうか。子どもが他者との個々の相違を認識していく過程、そして、その相違のまとまりとしての集団を捉える過程に焦点を当て、その個々の相違や相違のまとまりとしての集団を受け入れていく過程を、「寛容」として研究対象とする分野があっても良いのではないであろうか。このような研究展開は、「偏見」への接近における多様な水準の研究の共同を主張するブラウンの文脈のなかにも位置づけられると考えられるのである。

もっとも、「集団」が、生まれてすぐの子どもにとって、白紙であったり、それほど悠長に時間が経ってから影響力を行使し始めるわけではないことも確かである。ブルーナー（平光訳、1972）は、幼い子どもへの貧困の及ぼす影響を論じ、「幼い子どもたちに関する研究から出てきたものがあるとするれば、『のけものにされること』すなわち一人のおとなとして親として機会（希望）をもてないことが、その子どものなかに希望の喪失という形ですぐに反映されるということである。人生の二年目には、子どもが、この希望の喪失を反映しはじめる。」と述べるのである。それでも、敢えて、個から出発し、個の出発の当初から、そして個の成長と発達の過程において、相違する他者を認識し、集団の概念を獲得して、その集団からの影響を受けていくダイナミズムを明らかにしていく研究の必要性を指摘しておくことにする。いうまでもなく、さきに述べたFishbeinやKillen, Lee-Kin, McGothlin, Stangor, & Helwig (2002)らの研究は、ここに位置づけられるともいえる。

さらに、われわれは、もう一つの人間の多様性への寛容を対象とする研究分野について提案しておきたい。それは、もう、ブラウンに照らせば、偏見研究に包含できないものかもしれないが、米国の国語辞典に記述されているような寛容（tolerance）研究の分野である。すなわち、「自分とは相違している他者の諸特徴を認識し、異なる意見や考え方、多様な能力、性格的特徴、態度や行動、身体的外見など、その自分とは相違する他者の諸特徴を、容認・許容、あるいは歓迎し、あるいは黙認すること」、と定義されるような寛容への接近である。これ



は、最も原初的な水準における寛容研究ではないであろうか。国家と国家の対立、人種対立や民族対立や宗教対立、国内における階級や文化間の対立ばかりでなく、近隣の人々の諍いや意見の対立、職場や学校における「いじめ」、あるいは些細な人と人の行き違いなどについて折り合いをつけることに関わる「寛容」もまた、多様な水準における寛容研究の一つになるのではないかと、すなわち、広大な寛容研究の分野に、基礎的な資料を提供するのはではないかと考えるのである。

発達過程において、他者との相違に遭遇するのは、脱け出せない所与の集団の産物としての人間の多様性に根拠を持つ諸特徴ばかりでなく、比較的乗り越えることが容易な人間の多様性にもとづく諸特徴であることも少なくない。われわれが、小学校高学年の児童を対象に、「友だちと違うところはどんなことか」と問い、自由記述で回答を求めたところ、運動能力・知的能力・芸術的能力・身体的能力などの能力、行動的特徴、性格、好み、考え方、所属・処遇などのカテゴリーに分類される諸特徴が示された（濱田・渡辺、1999）。ウォルツァーの取り扱う寛容と次元や水準が異なることは自明であるが、ここには、脱け出そうと試みれば脱け出せる種類の諸特徴が列挙されているのである。われわれは、従来の寛容や偏見研究では取り上げられなかった種類の相違に目を向けようと思う。すなわち、所与の確固として出来上がっている集団の諸特徴ではなくて、いまだ脈絡の無い個々バラバラな諸特徴について、上からでなく下から探究しようとする。この理由は、従来の研究方向に問題があるとするからではない。寛容や偏見研究においては、上からの検討は必要不可欠であるが、従来の研究においては、下からの探究がきわめて不十分なので、そのギャップを埋める必要があると考えるからである。少なくとも発達心理学的研究においては、下からの研究に意味があると考えらるからに他ならない。個々の諸特徴への寛容の吟味を通して、それに反映される集団、さらには、集団を規定する文化や体制の枠組みの検討へと歩を進めようとするのである。

「所与の集団」としての人種や民族が取り上げられるとき、異なる他者をそのままに受容しあう以外の道はないと思われる。『アンネの日記<完全版>』の訳者である深町（1994）は、そのあとがきで、「アンネの悲劇の

もととなった<異質なものへの不寛容>は、今日なお、世界各地で新たな紛争をひきおこしています」、「<異質=悪>と見て敵視するのではなく、また、異質なものを同化させようと強制するのでもなく」、「たがいに異質であることを認め、尊重しあってこそ、はじめてそこに、真の平等への差別撤廃への道がひらけるのであり、その第一歩は、相互に相手をよく知ろうとする謙虚さにあるのではないのでしょうか」と述べている。数土（2001）も同じ地点に立っているように見える。彼は、「自己を否定することなく、他者を受け入れるための条件」、すなわち、他者と共に生きるための条件、の明確化を問い、「『理解できない／理解されない』ことを互いに理解しあっているときにはじめて、私たちは互いの違いを受け容れあい、かつ自分が何者であるかを主張しあう関係を形成することができる」と結論づけている。

われわれが企図している発達途上にある児童生徒を対象とする寛容研究においては、事情が異なる側面がある。昭和初期に生きた童謡詩人金子みすゞ（1984）が、「鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい」と詠ったように、相違する他者を受け容れる枠組みの存在が、その前提として不可欠であるのはいうまでもない。その一方、他者の諸特徴を、そのままの形で、受け入れるのか、それとも、他者に変化を要請するのかという問題に、絶えずつきまとわれるのである。すなわち、他者と相違する特徴を個人差としてとらえるか、発達差としてとらえるか、という問題が必然的に生起するのである。

たとえば、「運動が不得手で、走るのが遅い」特徴を持つ子どもがいた場合、「遅い」という個人差を、そのままに受け容れることが、素晴らしいかどうかという問題を考えてみたい。様々な個人差を、手放しで受け容れる寛容さを持つことは大事なことである。その当該の子どもは、身体的障害のために、走るのが遅いのかもしれないし、その特徴は何らかの生得的な要因に起因しているのかもしれない。ただし、その子どもに対して走ることを励まし、彼自身が練習を積み重ねれば、速く走ることができるようになるのかもしれないのである。子どもの特徴をそのまま受け容れることが、走るのが遅いという「所与」のレッテルから抜け出す機会を奪うことだって無いとはいえないのである。もっと切実な問題を取り上げれば、「人に意地悪をする子」をそのまま受け容れ

ることはできないのである。よりよい人間像へ向けて、彼の変化を要請し、「立派になった」彼を受け容れようとするのは間違いであろうか。そのように考えると、寛容は、限りなく恣意的で任意的なものに変化する可能性を秘めていることになる。これもまた、危険であるともいえる。他者の相違する特徴として、数学ができること・できないこと、身体的に格好良いこと・悪いこと、活発なこと・おとなしいことなど、数えきれない特徴が列挙され、それぞれについて、そのまま受け容れるべきか、それとも変化を要請すべきか、が問われるのである。

## 6. 「自己と相違する」他者の特徴と「他者と相違する」自己の特徴への寛容

個々の児童生徒の諸特徴について取り上げるとき、自分とは異なる他者の諸特徴と他者とは異なる自己の諸特徴の二種類のものが区別される。この二種類の諸特徴に対する寛容が、われわれの検討課題である。この検討の前提として、他者と自己の相違を明らかにすることが必要であり、そのためには、他者と自己を比較するという行為がなければならない。比較があつて初めて自己と他者の相違が明らかになり、それへの寛容を問題にすることができる。直感的には、非常に幼い子どもであっても絶えず比較を行っているように思われる。したがって、当然、このような比較過程の発達を取り扱った研究が蓄積されていると想定するのであるが、比較にもとづいた「素朴な」相違の「生の」内容を含んだ資料が多いとは言えない状況にある。

従来、寛容や偏見が問題にされるときに取り上げられてきたのは、自分とは異なる他者の諸特徴であった。他者が「所与」の集団である場合には、改めて、寛容の対象となる他者を問う必要はないかもしれないが、「所与」の集団に必ずしも付随しない個々の諸特徴を取り上げて、その対象に対する寛容を問題にする場合には、5.でも多少触れた他者の諸特徴について、その内容のカテゴリー分類を含めて、自己とは異なる他者の諸特徴とは何か、が問われなければならないのである。確かに、他者の諸特徴の認知に関しては、Wheeler & Miyake (1992)や高田 (1991, 1992, 1994) などの研究があるが、その相違する他者の諸特徴を自己がどのように捉えているかまで踏み込んだ研究は非常に少ないのである。それ

に加えて、自己意識、たとえば「他者評価懸念」といった一般的抽象的な他者から見られている自分、すなわち、他者を經由して自己に帰ってくる意識についての研究以上に、自己を起点として他者に向かっていく他者意識に関する研究、とりわけその発達途上の児童生徒を対象とした研究は、殆ど行なわれていないのである(辻, 1993)。この分野の研究資料の蓄積は、今後の課題である。

ここでは、もう一つの方向の寛容、すなわち、他者への寛容と対比される、それとは逆方向の自己への寛容を問う研究を、寛容研究のなかに位置づける必要があると提案したいのである。これまで、他者と異なる自己の諸特徴への寛容は、全く問題にされてこなかったと思われる。しかし、意外ではあるが、この分野の研究は、不十分ではあるものの、他者の諸特徴への寛容以上に、研究が進められているとも言えるのである。

児童を対象とする研究において、引用されることの多いRubleら (1980) の研究では、社会的比較にもとづいた自己評価は、幼児や小学校2年生では困難であり、小学校4年生になって初めて可能になる、と報告している。また、Ruble (1983) では、幼児期や小学校低学年時においても社会的比較が行われるが、その機能は、自己評価でなく、規範習得や他者との関係維持であること、が指摘されている。さらに、Suls, & Mullen (1982) は、比較の生涯発達モデルを提唱して、4歳から8歳までの幼児や児童においても社会的比較が行われるが、8歳以上になって、類似他者との比較が優勢になり、青年期に頂点に達することなど、を示している。

わが国においても、少数ではあるが、児童期における自己認知や自己概念に関する発達の研究が進められている。たとえば、高取・福田 (1985) は、面接法による調査から、6、7歳頃が、身体的特徴、服装、行動などの外面的特徴によって自己や他者を認識する段階から、能力や性格のような自己や他者の内面的特徴へ目を向け始める段階への移行期であることを指摘している。古くは、田中 (1964) も、ソシオメトリーによる調査から、この時期に外面的なものから内面的なものへ目を向けるようになっていくことを示していたのである。日下 (1990) は、小学校児童を対象に、自己の変化への期待について調査し、小学校3年頃から自己への変化期待が急増すること、学年進行とともに、変化期待の内容が性格や行



動・態度へと移行していくことなど、を明らかにしている。

また、Montemayor, & Eisen (1977) は、20答法によって、10歳から18歳までの児童生徒の回答を検討し、能力のように一定比率を維持するもの、所属や持ち物や身体的特徴のように年齢の上昇とともに減少するもの、及び対人関係や道徳的価値観のように年齢の上昇とともに増加するものに区分している。すなわち、自己概念が知覚的外面的なものから内面的なものに変化することを示したのである。遠藤 (1981) も、20答法によって、小中学生を調査し、中学生になると、性格・気質が増加し、能力が急減することを明らかにしている。

このような自己認知や自己概念は、自分をどう見ているかということであり、次には、この自己認知や自己概念に対して、どのような態度を取り、どのような感情を持つかが問われる。その態度や感情が、自己への寛容である。別の言葉でいえば、自己を受容するか拒否するか、ということになる。したがって、自己への寛容は、自己受容と密接に関連しているのである。いうまでもなく、自己受容研究は、青年期を中心に膨大な研究蓄積がある。近年のわが国における文献に限っても、多数報告されている（たとえば、伊藤、1991、1992；沢崎、1993；上田、1996など）。自己への寛容と自己受容は、個々の諸特徴に力点があるのが前者で、全体としての自己に力点があるのが後者であると区分することも可能であるが、本稿では、その異同についての議論には立ち入らないことにする。取りあえず、自己の確立は青年期であるといわれるけれども、幼児期や児童期を含めて、他者と相違している自分の様々な諸特徴を受け入れる態度や感情に関わっている極めて広い内容を含むものとして、自己への寛容を捉えておくことにする。Erikson (1977/1979) の基本的信頼感における他者信頼と自己信頼の感覚なども関連して、発達の初期から、自己の受け容れは、人間発達の基底にあり、重要な役割を果たしていると考えられるのである。

最近、河地 (2003) は、東京、ストックホルム、ニューヨーク、及び北京に住む中学3年生を対象として、面接と質問紙調査を行い、日本の子どもたちは、他の国の子どもたちと比較して、はるかに自信を持っていない子どもたちであること、を示している。日本の子どもたちが

他の国の子どもたちに比べて、自己を肯定的に捉えていないとの指摘は、新聞紙上でも度々取り上げられている（たとえば、2001年8月1日付朝日新聞）。日本の子どもたちの自尊感情が低いという確かな資料が多数あるわけではないけれども、自尊感情、あるいは、セルフ・エスティーム (self-esteem) の邦訳の一つでもあると考えられる自己肯定感の低下が言われ、それを高めるための試みが続くも報告されている。また、日本の若者が、彼らに見られる自尊感情の低さを意識することを回避し、自己については問わないで、別の基準を設定して、「仮想的有能感」=他者軽視・否定に生きているとの指摘が、大きな反響を呼んでいる (速水、2006)。筆者は、このような若者においては、自己への寛容、及び他者への寛容の両者とも低い状況にあると考える。そして、日本の青年がやさしく、他者と同調する傾向が強いとされることから、多くの若者は、他者への寛容は高く、自己への寛容が低い状況にあると推察するのである。速水自身も、「日本の若者は仮想的有能感そのものが高いというよりは、むしろ自尊感情が低いところに特徴があり、その中で他者軽視による仮想的有能感が高い型と低い型に二分されている」(速水著、前掲書171頁)と述べている。いずれにしても、日本の若者における寛容において、自己への寛容が特に問題であることは確かである。

以上、日本の児童生徒における寛容を巡る問題について論じてきた。本稿で取り上げた論点に加えて、さらに論じる必要のある幾つかの問題も存在する。ここでは、主として、発達心理学的文脈においては、個人のレベルの寛容を専ら取り扱っており、集団のレベルの寛容については全く取り上げていない。仲間集団への受け容れについては、個人レベルの寛容とは、別の視点も求められる。たとえば、集団に同調するがゆえに生起するであろうか、同じ好ましくない特徴を持っている友人の場合には、外集団の友人より、内集団の友人を排除する傾向が強といった「黒い羊効果」(大石、2003など)に類似した傾向なども認められる。また、児童生徒の持っている諸特徴と関わって、子どもの仲間集団への受容と拒否を問題にする必要がある。仲間集団の問題については、欧米では盛んに研究されているけれども (アッシャー・クワイ著/山崎・中澤監訳、1996)、わが国では、住田

(2000) の労作などを例外として、実証的研究が数少ない分野になっている。さらに、その他にも、児童生徒が生きる文化的背景の相違によって、特定の特徴には寛容であるが、別の特徴には非寛容であることも少なくないし、集団主義の文化と個人主義の文化が寛容と非寛容に及ぼす影響なども検討されなければならない。寛容という広大な領域の中にある、いくつかの論点を上げてきたが、多くの論点が触れられないままで残されていることを承知した上で、本稿を閉じることにする。

## 文 献

- オールポート著／原谷辰夫・野村昭訳 1961 偏見の心理 培風館 (Allport, G.W. 1954 *The nature of prejudice*. Reading, MA: Addison-Wesley.)
- 青野篤子・湯川隆子編 2006 フェミニスト心理学をめざして—日本心理学会シンポジウムの成果と課題—かもがわ出版
- 朝日新聞 2001 「21世紀に希望もてない」日本の中高生の6割に 8月1日付社会面記事
- アッシャー・クワイ編／山崎晃・中澤潤監訳 1996 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するころ—北大路書房 (Asher, S.R., & Coie, J.D. (Eds.) 1990 *Peer rejection in childhood*. New York: Cambridge University Press.)
- Bakanic, Von 2006 *Prejudice: Attitude about race, class, and gender*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- 坂西友秀 2005 近代日本における人種・民族ステレオタイプと偏見の形成過程 多賀出版
- ブラウン著／橋口捷久・黒川正流編訳 1999 偏見の社会心理学 北大路書房 (Brown, R. 1995 *Prejudice: Its social psychology*. Oxford: Blackwell.)
- ブルーナー著／平光昭久訳 1972 教育の適切性 明治図書 (Bruner, J.S. 1971 *The relevance of education*. New York: Norton.)
- Chaplin, J.P. 1985 *Dictionary of Psychology Second Revised Edition*. New York: Dell.
- Chin, J.L.(Ed.) 2004 *The psychology of prejudice and discrimination: Racism in America, ethnicity and multiracial identity, bias based on gender and sexual orientation, disability, religion, physique, and other traits*. Westport, CT: Praeger.
- コールマン著／藤永保・仲真紀子監訳 2004 心理学辞典 丸善 (Colman, A.M. 2001 *A Dictionary of Psychology*. Oxford: Oxford University Press)
- Corsini, R.J. 1999 *The Dictionary of Psychology*. Philadelphia, PA: Brunner/Mazel.
- Corsini, R.J., & Auerbach, A.J. 1996 *Concise Encyclopedia of Psychology, Second Edition*. New York: John Wiley & Sons.
- Dovidio, J.F., Glick, P.S., & Rudman, L.A.(Eds.) 2005 *On the nature of prejudice: Fifty years after Allport*. Malden, MA: Blackwel.
- 遠藤毅 1981 自己概念に関する研究 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 420-421.
- エリクソン著／仁科弥生訳 1977/1979 幼児期と社会 1・2 みすず書房 (Erikson, E.H. 1963 *Childhood and society. Second Edition*. New York: Norton.)
- Fishbein, H.D. 2002 *Peer prejudice and discrimination: The origins of prejudice, Second Edition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 濱田直美・渡辺弘純 1999 児童における他者と相違する自己の諸特徴の受容 愛媛大学教育学部紀要, 45(2), 41-60.
- 深町真理子 訳者あとがき フランク, アンネ著／深町真理子訳 1994 アンネの日記<完全版> 文芸春秋, 581-587.
- 速水敏彦 2006 他人を見下す若者たち 講談社
- 伊藤美奈子 1991 自己受容尺度作成と青年期自己受容の発達的变化—2次元からみた自己受容発達のプロセス— 発達心理学研究, 2, 70-77.
- 伊藤美奈子 1992 自己受容と性格特性との関連についての—考察— 心理学研究, 63, 205-208.
- 金子みすゞ 1984 金子みすゞ童謡集<わたしと小鳥とすずと> JULA出版局
- 河地和子 2003 自信力はどう育つか—思春期の子ども— 世界4都市調査からの提言 朝日新聞社
- 上瀬由美子 2002 ステレオタイプの社会心理学—偏見の解消に向けて— サイエンス社
- 上瀬由美子・小田浩一・宮本聡介 2002 視覚障害者に対するステレオタイプの変容—電子メールを用いたコ

- コミュニケーションを介して 江戸川大学紀要<情報と社会>, 12, 91-100.
- 木松憲幸 1986 精神薄弱児に対する普通児の態度と交流経験との関係 特殊教育学研究, 24, 11-19.
- Killen, M., Lee-Kin, J., McGothlin, H., Stangor, C., & Helwig, C.C. 2002 How children and adolescents evaluate gender and racial exclusion. *Monographs of the society for research in child development Serial No. 271*, 67(4). Boston, MA: Blackwell.
- 小林哲郎 2003 インターネット利用は社会参加を促進するか—PC・携帯電話の社会的利用の比較を通して 第20回情報通信学会大会発表
- 近藤いね子・高野フミ 2001 プログレッシブ和英中辞典第三版 小学館
- 小西友七・南出康世編集主幹 2001 ジーニアス英和大辞典 大修館書店
- 日下正一 1990 児童期における自己の変化についての認識と予測および期待に関する研究 長野県短期大学紀要, 45, 109-120.
- Mackie, D.M., & Smith, E.R. 2002 *From prejudice to intergroup emotions*. New York: Psychology Press.
- 松村明編 1995 大辞林第二版 三省堂
- 松村明監 1995 大辞泉 小学館
- メンダス著／谷本光男・北尾宏之・平石隆敏訳 1997 寛容と自由主義の限界 ナカニシヤ出版 (Mendus, S. 1989 *Toleration and the Limits of Liberalism*. Basingstoke, Hampshire: Macmillan Press)
- メノカル著／足立孝訳 2005 寛容の文化—ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン 名古屋大学出版会 (Menocal, M.R. 2002 *The ornament of the world: How Muslims, Jews, and Christians created a culture of tolerance in medieval Spain*. New York: Little, Brown and Company)
- Montemeyor, R., & Eisen, M. 1977 The development of self-conception from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, 13, 314-319.
- 森本あんり 2004 異文化の混在と寛容を考えるために 福音と世界 (9月号), 40-43.
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司編 1999 心理学辞典 有斐閣
- Nelson, T.D. 2005 *The psychology of prejudice*. Boston, MA: Allyn & Bacon.
- Neufeldt, V.E.(Ed.) 1988 *Webster's New World Dictionary of American English, Third College Edition*. New York: Simon & Schuster, Inc.
- 新村出編 1998 広辞苑第五版 岩波書店
- 大石千歳 2003 社会的アイデンティティ理論による黒い羊効果の研究 風間書房
- 岡本夏木・清水御代明・村井潤一監 1995 発達心理学辞典 ミネルヴァ書房
- Pearsall, J.(Ed.) 1998 *The New Oxford Dictionary of English*. Oxford: Oxford University Press.
- Plous, S.(Ed.) 2002 *Understanding prejudice and discrimination*. Boston, MA: McGraw-Hill.
- Ruble, D.N., Boggiano, A.K., Feldman, N.S., & Loebel, J.N. 1980 Developmental analysis of the role of social comparison in self-evaluation. *Developmental Psychology*, 16, 105-115.
- Ruble, D.N. 1983 The development of social comparison processes and their role in achievement-related self-socialization. In E.H. Higgins, D.N.Ruble, & W.W. Hartup, (Eds.) *Social cognition and Social Development*. New York: Cambridge University Press, 134-157.
- 沢崎達夫 1993 自己受容に関する研究 (1) —新しい自己受容尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討— カウンセリング研究, 26, 29-37.
- 数土直紀 2001 理解できない他者と理解されない自己—寛容の社会理論 勁草書房
- Suls, J., & Mullen, B. 1982 From the cradle to the grave: Comparison and self-evaluation across life-span. In J. Suls(Ed.), *Psychological perspectives on the self. Vol.1*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 97-125.
- 住田正樹 2000 子どもの仲間集団の研究 [第2版] 九州大学出版会
- Swim, J.K., and Stangor, C.(Eds.) 1998 *Prejudice: The target's perspective*. San Diego, CA: Academic Press.
- 高田利武 1991 社会的比較：その発達過程 三隅二不二・木下富雄編 現代社会心理学の発展Ⅱ ナカニシヤ出版, 96-119.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社



- 高田利武 1994 日常事態における社会的比較の様態  
奈良大学紀要, 22, 201-210.
- 高取憲一郎・福田真由美 1985 言語、コミュニケーション、自-他像の自覚の発達 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学, 27, 277-286.
- 竹林滋・東信行・寺澤芳雄・安藤貞雄・小島義郎・河上道生編 2004 新英和大辞典第六版 研究社
- 田中熊次郎 1964 児童集団心理学 明治図書
- 土屋恵一郎 2002 正義論/自由論—寛容の時代へ 岩波現代文庫
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- 上田琢也 1996 自己受容概念の再検討—自己評価の低い人の“上手なあきらめ”として 心理学研究, 67, 327-332.
- 牛島義友・坂本一郎・中野佐三・波多野完治・依田新編 1969 教育心理学新辞典 金子書房
- ウォルツァー著/大川正彦訳 2003 寛容について みすず書房 (Walzer, M. 1997 *On Toleration*. New Haven and London: Yale University Press)
- 渡辺弘純・植中慶子 2003 小学生の障害児(者)に対する態度に及ぼす交流経験の影響 愛媛大学教育学部紀要, 49 (2), 15-30.
- 渡邊敏郎・Skrzypczak, E.R.・Snowden, P. 編 2004 新和英大辞典第五版 研究社
- Wheeler, L., & Miyake, K. 1992 Social comparison in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 760-773.
- Winch, R.F. 1958 *Mate-selection: A study of complementary needs*. New York: Haper & Row.
- 山田忠雄主幹・柴田武ほか編 2005 新明解国語辞典第六版 三省堂
- 山内隆久 1996 偏見解消の心理—対人接触による障害者の理解 ナカニシヤ出版
- Young-Bruehl, E. 1996 *The anatomy of prejudices*. Cambridge, MA: Harvard University Press.